

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日 漢語書物刊行會 漢語雜誌第六十七号  
平成二十四年二月一日 発行 漢語雜誌 第四百十五卷第二期

# ホトトギス

二月号



## 俳句随想 〔三百五十六〕

汀子

俳句の上手下手はどの様にして判断できるのだろうか。作者が分つて初めて価値の出る作品もある。他人が作った俳句を批評するときは善意に解釈しなければならぬと高浜年尾はよく私に言っていた。自分の好みを他人に当てはめて俳句が下手だという評をする人がいるが、それは自分の勉強不足を露顯したようなものである。その人でなければ作れない俳句を志している人もいる。俳句作品に対して感想を述べる、批評をするのは余程広い知識と経験がなければならぬであろう。

今、日本では俳句を募集してイベントを開催することが驚くほど多い。特に、一年の後半に何千何万という句稿が選者の許に送られて来る。殆ど無記名であり、似たような句も多い。選を終えると選んだ句に対して類句の有無を調べる。発表した後も取り消さなければならぬ事態が起こる。実際、似た俳句が出来ないほうが不思議である。人間の考える事柄、自然の情景、状態などはそれ程異質なものではないであろう。素晴らしい俳句を詠まれた一句一句を鍵を掛けて仕舞って置く訳にも行かない。短詩型文学の宿命を担っている俳句に個性豊かな作品を期待してやまないのである。

# 句日記 汀子

平成二十三年二月四日 工業倶楽部

待たれぬし報せ届きて春となる  
春といふだけで旅路の華やげる

二月五日 芦屋ホトトギス会

浅くともかけがへのなき春となる  
鎌倉のうはさも二三実朝忌  
盆梅を大地に下ろす日も近し

二月六日 下萌句会

立春と聞けば忽ちそれらしく  
旅の枷ほどきたる如春となる  
一寸した修理で済みし椅子の春  
術後てふ春めく心添ふことも

二月七日 ロイヤル俳壇

一周忌とて悲しみの春となる  
梅が香の馥郁と汝が一周忌  
今もなほ月日止まりて偲ぶ春  
才惜しみ梅にめぐりて来し忌日  
梅が香は汝がための供華なりしかな

二月八日 大阪倶楽部

早春や今日が明日に明後日に  
濃紅梅よりはじまりし順路かな

薄氷の水面を空に明け渡す  
針供養終へて月日の還らざる

二月八日 綿業倶楽部

はじめまつてある雪解の音なりし  
夜は一人住まひの庭のクロッカス  
術後よきてふ春めける便り来し

二月十日 清交社

立春の明るき会話行き交へる  
旅予定又一つ足し日脚伸ぶ  
日脚伸びぬしと気づきしよりのこと  
立春と諾ふことも二三日  
梅咲いてぬし狭庭抜け帰られよ

二月十二日 序句 竹下陶子句集

一筋につらぬく心梅が香に  
すぐ消ゆるとて残雪に名残あり  
一つづつ仕事の枷を解きし春  
又少し庭をせばめて木の実植う  
萌ゆる色見えぬ末黒の芒かな  
予定切り上げ残雪の山下る  
春の雪帰路に不安のつる午後

二月十五日 有恒俳句会

雛菊の鉢それとなく置く書齋  
春の雨上りしばかり着陸す  
雛祭嘘も真もあるがまま  
そののちの消息問ふも雛祭

二月十五日 無名会

風花ともうあなどれぬ降りとなる

日を隠す雲の行方やいぬふぐり  
鶯といへば吉野の旅近し  
晴れてのち曇りのち晴いぬふぐり  
春の雪つのるばかりの帰路となる

二月十六日 夏潮句会

ともかくも山より下りて春の雪  
山降りて来たる安堵の春の雪

二月二十四日 きさらぎ会

寒明けしのちの陽気の定まらず  
寒明けしことが油断となりしかな  
見る限り春光纏ひはじめけり  
海峡を渡る大橋 春一番  
春一番吹きて昨日のなかりけり  
濃紅梅競はぬ孤高なりしこと

二月二十五日 時雨会

片栗の花の斜面を転がる日  
研究の始まつてをり鳴雪忌  
片栗の花を見しより旅心  
寄宿生なりしは昔鳴雪忌  
ふたたびの余寒に備へありしこと

濃紅梅よりはじまりし順路かな

風花ともうあなどれぬ降りとなる

# 廣太郎句帳

廣太郎

春浅し白を都心のキャンパスに

二月十七日 登高会

点眼の一滴にある余寒かな

手術室ドア開くより余寒かな

二の午や伏見の酒もその中に

看護師と片目で会話する余寒

初午に来合はせてゐる祝ぎの旅

下萌に犬は足より鼻が先

二月十九日 六甲会

目から鱗春一番が落しゆく

新しきレンズで見ゆるものは春

庭の景春一番に歪みゆく

紅梅の蕊くたくたとふらふらと

まんさくに視野広がつてゆきにけり

二月十九日 虚子記念文学館投句

紅梅の花弁日差に疲れけり

二月二十二日 若水句会

片栗の花騎馬武者の駆けし道

片栗の花まだ閑かなる吉野

春一番虚子百三十七歳に

狼籍は春一番か野良猫か

この先は春一番も拒む丘

路の臺明してゆきし離着陸

路の臺蝦夷の大地を解きゆく

二月二十三日 目黒学園句会

鶯に街騒消えてゆきにけり

咲き満ちて梅の輪郭とは微妙

猫の日といふ早春の謀

紫に暮れてゆく早春の街

六甲を指呼に初音の芦屋川

鶯の訛を聞くも山路かな

二月二十四日 竹下陶子様句集序句

暖かや句歴七十年を祝ぎ

二月二十四日 石川可南子様送別

強東風に羽搏く君の未来かな

二月二十六日 本伝統俳句協会関東支部大会

昨日春一番今日はつくば冷

過去現在未来を結ぶ都市うらら

ものの芽の未来へ伸びてゆくつくば

二月二十七日 野分会東京例会

春一番六甲風押し返す

絵踏してす系は司教か教皇か

平成二十三年二月十日 土筆会

四代の使ひ継がれし針祭る

恋語る軒下も借り春時雨

クロッカス咲かせ無口な主かな

二月十四日 朝日カルチャー若草句会

早春やちよつと世間を遠くして

陽炎の中メス持つ手伸びてくる

バレンタインデーに始まる腐れ縁

水音に風音に早春を聞く

陽炎に溶けゆく君の悌よ

過去を持つ女のバレンタインデー

二月十五日 草木瓜会

空を飛びたいのは犬ふぐりの夢

犬ふぐり人に好かれてゐたき色

# 雑詠

## 廣太郎 選

さらさらと雨あがりゆく森の秋 神戸 長山あや  
 法師蟬声の終りは折りめく 同 同  
 触れてゆく風の言伝て薄紅葉 同 同  
 山霧のポストに落とす昏き音 同 山田佳乃  
 一粒の露に結びし草の色 同 同  
 夕月夜海深々と島を抱く 同 同  
 秋天を出張ちよつとアメリカへ 東京 今井千鶴子  
 文書きて今日は子規忌と結びける 同 同  
 虚子の軸かけ流したる子規忌かな 同 同  
 星流れギリシャ神話の虧けにけり 福山 竹下陶子  
 望月の出づ刻々の光かな 同 同  
 虚子にホ句学びし誇り生身魂 同 同  
 一寸に二十二鱧の骨切ると 徳島 上崎暮潮  
 語尾ばかり聞えくるなり法師蟬 同 同  
 法師蟬森林浴といふ言葉 同 同  
 露の身の多忙さに救はるること 神戸 千原叡子  
 目の癒えて塩辛蜻蛉赤蜻蛉 同 同  
 目の癒えて爽涼の空星の数 同 同

香水のかをり徐行の車より 徳島 岩田公次  
 汗の子の我との風呂も何時までぞ 同 同  
 あめんぼに生まれ流れに抗へる 同 同  
 配分の逆転へ急ぐ櫛紅葉 香川 湯川 雅  
 朴落葉山気一枚づつ剥れ 同 同  
 夜学子の一人が夜の街に消ゆ 同 同  
 天に星数多や地には風の盆 京都 安原 葉  
 句碑の虚子在す高きに登りけり 同 同  
 颱風に追はれつつ逃げきりし旅 同 同  
 せはしなきもの盆僧の木魚かな 熊本 岩岡中正  
 盆僧の昔語りも飽きにけり 同 同  
 まだ若き施餓鬼の僧であられしが 同 同  
 はぐれ鹿老の歩みでありにけり 奈良 古賀しぐれ  
 破築地鹿行く方へ曲りけり 同 同  
 鴟尾の秋水ゆくやうに雲のゆく 同 同  
 秋暑し乾きしままの釣瓶井戸 東京 大久保白村  
 ホステスの寄付は源氏名秋祭 同 同  
 濃淡は白にもありて蘭の秋 同 同  
 突つ立てるままに灯を消す曼珠沙華 同 橋本くに彦  
 豊穰の色を深めて秋の風 同 同  
 その音色もう出しますか昼の虫 同 同  
 風の尾根風の谷なる芒原 龍ヶ崎 今橋真理子  
 芒野に影もきらめくものとなる 同 同  
 それよりは獣道なる芒原 同 同

# 雑詠句評（二月号より）

場所で、当時はそれこそ信濃を席捲していたようだ。何かそんな時代の情景が目の前に迫ってくる。季題の姿から、北の越後からは、それこそ謙信入道、即ち上杉謙信も現れてきそうな雰囲気があり、迫力満点である。（廣太郎）

## 渡り鳥光の粒となる高度 金沢 藤浦昭代

渡り鳥が群をなして飛んで行く。或る高さとなった時に日の光を浴び群れをなしていた一羽ずつが独立して光の粒となつて飛んで行つたということであろう。雄大で綺麗な風景を述べただけでなく渡り鳥の淋しさ悲しさまで感じられる佳句と思う。（保佳）

秋になり、渡つて来る鳥、渡つて行く鳥様々な情景を醸し出してくれるこの「渡り鳥」の季題であるが、何れにせよ命懸けの長い旅路が運命付けられている。その舞台である空の高さに着目して、大宇宙にも繋がる広さと、渡り鳥の躍動感を美しく対比させている句である。（廣太郎）

（以下略）

中正・保佳・眞理子  
むつみ・静龍・とほ歩  
千鶴子・葉・憲明  
美奇・廣太郎

## 甲斐信濃入道雲の睨み合ふ 相模原 木村享史

甲斐と信濃は隣国。戦国史でも覇を競った武将たちの興亡の地。この両国の入道雲が「睨み合ふ」と詠んだところが楽しい。歴史的想像力をかき立てるし、睨み合う入道雲の構図にも、ふとしたユーモアがある。

甲斐信濃の国境には高い山が立ちはだかる。その岬々たる夏山の上に真白で大きい坊主頭の入道雲が仁王立ち。この姿を思っただけでも楽しいが、「入道」雲といえは、この頃の武将には法体が多い。甲斐の武田信玄も越後の上杉謙信もそうだが、どれもいかに強そうだ。（中正）

戦国時代で言うならば、甲斐は御存知武田信玄が君臨していた

# 天地有情

父に又名を忘れられ露けき夜  
新米も父には粥になりにつけり  
小望月窓に離陸となる家路  
十六夜の離陸となりし遠き旅  
終戦の日を知る物置のラジオ  
生身魂大和に乗つてみたといふ  
淋しめばかなかなしきり鳴く日かな  
御嶽の峻険に耐へ男郎花  
石路の黄を青ざめし黄と思ふ日よ  
愁ひなき時石路の黄に会ひたかり  
これからは楽しきことを爽やかに  
天上の露けさのきはまれば紺  
つゆくさや胸にたたみし祝心  
秋冷のホテル最上階に祝ぐ  
露に濡れ風音にぬれ旅二日  
颱風一過大きな星の輝けり  
居眠りの生徒そのまま夜学の師  
露の世に四半世紀の句縁かな

芦屋 松田恭子  
同  
京都 安原 葉  
同  
東京 稲畑廣太郎  
同  
芦屋 長尾輝星  
同  
榎原 稲岡 長  
同  
熊本 岩岡中正  
同  
東京 今井千鶴子  
同  
河野美奇  
同  
内藤呈念  
同

草の道いつしか露の径となる  
黄の揺らぎつつ十六夜の月となる  
術後の目いざよふ月の歪みなく  
十六夜の月を沈めし江津湖かな  
旅果の二十三夜の雨の情  
待つ心後の月へとまた育つ  
花火吾の眼をめざし来し立ち止まる  
花火咲く窓に夕食セッティング  
十五夜と聞きし明るさあり仰ぐ  
動きぬるものに時計と金魚玉  
法師蟬裏六甲を鎮めたる  
集ひたる合同句会爽やかに  
入り乱れつつ八千草の庭となる  
葉月はや風にうつろひ見えそめて  
木犀の香に水音のしのび寄る  
露けしや寄せてはかへす波の音  
ホトトギス連ももう過去踊見る  
老いたれど心老いまじ踊見る

龍ヶ崎 今橋真理子  
同  
東京 山田閏子  
同  
宝塚 水田むつみ  
同  
熱海 嶋田摩耶子  
同  
嶋田 一步  
同  
吹田 宮崎 正  
同  
箕面 井上浩一郎  
同  
神戸 長山あや  
同  
徳島 上崎暮潮  
同

# 子選

# 天地有情句評

汀子

ご長寿を全うされた祈りのような一句。

石路の黄を青ざめし黄と思ふ日よ 榎原 稲岡 長

心の動きの微妙な働き。

父に又名を忘れられ露けき夜 芦屋 松田恭子

これからは楽しきことを爽やかに 熊本 岩岡中正

ご高齢の父上へ情の深い娘の介護。

爽やかな秋を迎えた喜び。

小望月窓に離陸となる家路 京都 安原 葉

つゆくさや胸にたたみし祝心 東京 今井千鶴子

遠い旅を家路につく安堵。

ささやかに祝う心持。

生身魂大和に乗つてみたといふ 東京 稲畑廣太郎

露に濡れ風音にぬれ旅二日 東京 河野美奇

戦艦大和に乗っていた経験を聞いて。

二日間の旅の思い出。

淋しめばかなかなしきり鳴く日かな 芦屋 長尾輝星

(以下略)